

## 思いやりの花

鹿児島県 鹿児島大学教育学部附属小学校

6年 今村 南風音

「あのう、すみません。ここどこですか。」

おばあさんのか細い声がふと聞こえた。

金曜日の夜。習い事の水泳でつかれきって帰ってきた。母が車を駐車場に停めて、さあ帰ろうとしたときのこと。一人のおばあさんが、私たち親子に話しかけてきた。

「どうかなさいましたか。」

と母が聞くと、おばあさんは、聞いたことのない地名を言って、そこに帰りたいということだった。しかもおばあさんは、私が住んでいる地域よりもはるか遠くから一人で来たという。

母がいったん車から出て、おばあさんが言う電話番号にかけてみた。真冬の午後7時。おばあさんを車の中に入れて、タオルケットで温めてあげた。おばあさんの手はおどろくほど冷たかった。でも、血管がうき出たしわしわのどこかなつかしい手であった。真冬の冷たい空気の中、おばあさんの心配そうな表情と、私の不安が交差して、重い空気がただよっていた。するとおばあさんが、

「どこの小学校なの。」と聞いてきた。

「附属小学校です。」

と元気よく答えた。おばあさんは感心したように大きくなずいた。しばらくして、

「どこの小学校なの。」

と、先ほどと同じ質問をしてきた。私は、(お年寄りだから忘れっぽいのかな) と思ったけれど、さっきと同じように、

「附属小学校です。」

と答えた。同じ質問を3回された。

やがて、おばあさんは警察に保護された。

不思議な感覚であった。テレビでよく見る「認知症」。おばあさんはおそらく認知症であろうと、むかえに来た警察官や、私の母も言っていた。でも、こんな身近に認知症の方がいるなんて。日本では、認知症が原因とされる行方不明の方が、年間一万人ほどいるという。

朝起きたら、あたりまえのように家族が「おはよう」と言ってくれる。でもこの「おはよう」が、あたりまえではなくなるかもしれない。

私はふと、

(あのとき、私たちがおばあさんに声をかけていなかったら、あのおばあさんはどうなっていたのだろう。もしかしたら、あの真冬の寒い夜にそのまま行方不明になってしまっていたのかも……) と思った。

私は、あのおばあさんに親切にしてあげられたのだろうか。でもこれからも、勇気をもって、困っている人に手を差し伸べたいと思う。

そして、家族とともにいる時間を大切に大切に過ごしていきたい。

私の「思いやり」という名の花。どんどん花を咲かせていきたい。